

A 次の課題文『多文化社会の〈文化〉を問う』（岩淵功一編著）を読んで、後の問いに答えなさい。

メディア研究者の間ではかなり知られているとはいえ、読者のなかにこのFM局（※注）を知る人は多くはないと思う。ベトナム語、タガログ語、英語、韓国・朝鮮語、ポルトガル語、スペイン語、タイ語、中国語、アイヌ語そして日本語を加えて十の言語で放送している、日本では数少ない多言語コミュニティFM放送局である。その設立の過程には想像を絶する苦勞とドラマがあった。

一九九五年一月十七日、阪神・淡路大震災が発生する。死者六千人を超える（正確には六千四百三十四人といわれている）大災害であった。FMわいわいがある長田地区は、地震による直接の被害だけでなく、木造の家屋が密集していたこともあって多くの民家や建物が火災に見舞われ、神戸市のなかでも最も被害が集中した場所である。避難場所の一つである南駒栄公園には震災直後から、崩壊した家や火災で焼け焦げた家から逃れてきた人たちが集まり、避難生活が始まった。その数、約二百九十人近くだったという。この二百九十人のうち百九十人がベトナム人、残り百人のなかで三十人がコリアンの人たちだ。当時から、十万人の人口を抱える長田区には、その一〇パーセント、つまり一万人近い定住外国人が生活していた。彼らもまた家を失い、公園に避難したのである。この南駒栄公園以外にも、鷹取中学、兵庫高校など数多くの場所に住む家を失った在日外国人が集まった。ところが、この避難生活でさまざまな問題が生まれる。まず何よりも二百九十人の人たちのコミュニケーションがとれない。震災の被害状況や救援情報も、日本人以上に韓国・朝鮮人やベトナム人には伝わらなかった。

震災前の時期、長田地区では在日韓国・朝鮮人や日本人が経営するケミカルシューズ工場で多くのベトナム人が働いていた。したがって長い間、この地区のケミカル工場や産業を支えてきた韓国・朝鮮人の人々と日本人やベトナム人との間には、深いつながりを持つ人々が多く存在した。しかし、地域のなかでベトナム人が、日本人や韓国・朝鮮人と、共に住む地域住民として相互に関わり合うことは少なかった。お互いに出身国が違い、文化が違う人たちが居住していることは感じながらも、面と向かってコミュニケーションをとりあうことはなかったのだ。そうした彼らが、緊急避難のために一つの場所に集まり共同生活を始めるようになったからといって、急にコミュニケーションができるはずもない。これはもつともなことだ。そこには「言語の壁」、そして「心の壁」があった。そしてまた差別意識もある。例えば、些細なこととはいえ、食の文化の違いも対立や差別的感情を誘発するきっかけになる。ベトナムの人たちにとって、大量の食品の買い溜めはごく普通の日常生活のあり方だった。いつ戦禍に巻き込まれるかもわからない厳しい状況の下での生活を余儀なくされ、ベトナム戦争を潜り抜けてきたベトナムの人たちにとって、多くの食料品を保存することは「生きていくこと」そのものに結び付いた生活習慣だからである。そのため、震災の直後、彼らは破壊された家のなかの冷蔵庫から食料品を運び出して、公園で焼き肉パーティーを始めることもあった。そうすると、「あいつら、どこからか肉を盗んできたんじゃないか」といった発言が飛び交い、対立が表面化する。断水状態が続き、飲料水の確保が困難になれば、その取り合いでまた対立が生じる。皮肉にもこうした葛藤や対立が沈静化していくのも、食料の分配を通じた共同作業からなのだが、いずれにしても震災を通じてはじめて、日本人もベトナム人も、同じ地区に異なる文化や歴

史を背負った人たちが住んでいる現実に直面するなかで、相互に接触し、コミュニケートする必要性に迫られたのだ。

在日外国人や日本人が混住しながらテント生活や学校・公民館での共同生活を強いられた困難な時期に、地元の教会組織やボランティアが被災ベトナム人救援連絡会を組織して、救援活動や翻訳作業を始めた。一月二十八日、震災から十一日後のことである。またその直後の一月三十日には、大阪市生野区の在日韓国人が運営していたミニFMの「FMサラン」のスタッフが駆け付け、同胞に被害救援情報を伝えるためにラジオ放送「FMヨボセヨ」を始める。どちらのケースも、正確な情報、必要な生活情報が「言語の壁」で届かない状況を打開するために、手探りで始まった活動だった。そして四月十六日には、「FMヨボセヨ」と「FMサラン」の協力によってカトリックたかとり教会を拠点とするボランティアの救援基地（当時の名称は「たかとり教会救援基地」）のなかに、ベトナム人向けの放送「FMユーマン」が開局した。「ユーマン」とはベトナム語で「友愛」を意味する。ベトナム人向けとはいえ、ベトナム語だけでなく、フィリピン人向けのタガログ語、スペイン語、英語、そして日本語の、五つの言語で伝える多言語放送である。この局の設立に関わったのが、現在FMわいわいの代表を務める日比野純一さんだ。救援活動や食料配給の情報、病院や医療活動に関する情報、またこうした緊急の救援情報以外にも、厳しい生活のなかで前向きな気持ちを持ってもらうために各国の音楽を流したという。素人による、まさに手作りの放送である。いまはFMわいわいの総合プロデューサーを務める金千秋さんは、当時の様子を次のように語ってくれた。

日本人と定住外国人との間に感情的な対立が生まれ、ときには「ベトナム人が食料を奪っている」といったデマが流れて差別意識が発露することもあった。「だが、人は誰でも人を助ける」——彼女が震災を体験したなかで得た、これが率直な感想である。

震災直後から、定住外国人が多い長田区には大阪の民団の人たちや多くの留学生も駆け付け、救助作業や炊き出しなどの救援活動に参加した。韓国から来たテレビクルーも神戸の災害の悲惨な状況を伝え、そのおかげで韓国からも多くの救援物資が届く。対立や葛藤があるなかでも、日本人と在日外国人の人々の間に協力関係が生まれた。こうしたなかで、ボランティア数人が交代で始めた「FMヨボセヨ」には「外人が外国人のためにという意識はまったくなかった」という。同胞に向けた韓国・朝鮮語の放送とはいえ、ときには日本語も交えた、被災した長田区のコミュニティに住む人々全員に向けた放送だからである。「FMユーマン」も五つの言語による放送であることが示すように、一つの特定の民族に向けた放送ではない。民族の境界を越えた、地域社会に住むさまざまな被災住民に向けた、そして被災住民自らが相互に励まし、声を上げるメディアとして始まった。こうした多くの人々の姿を、金さんは「人は誰でも人を助ける」という言葉で表現したのである。

FMわいわいは、この「FMヨボセヨ」と「FMユーマン」という二つの小さな局を一つにまとめるかたちで、前記の長田区の救援活動の一つの拠点だったカトリックたかとり教会の敷地に仮設のラジオ局を設置して、震災から約半年後、一九九五年七月十七日に放送を開始した。設立の理念は、マイノリティ自身が主体的に参加し関わるラジオ、それを通じて地域社会のなかで多民族・多文化共生の実現を目指すコミュニティFMラジオ局である。大震災という未曾有の事態が生み出した無許可の「海賊放送」、小さな放送局の誕生である。

長田区という東西三キロ南北五キロほどの小さい地区の出来事ではある。しかし、毎日定期的に、韓国語やベトナム語をはじめさまざまな言語が飛び交い、音楽が流れるメディア空間が開かれたのだ。このほんの小さな出来事、しかしそれは日本のこれまでのメディア空間に新たなページを開く画期的な出来事だったといえる。

グローバル化が急速に進む現代社会では、これまで「一民族＝一言語＝一国家」という自己理解のうえに構築された近代国家と国民(的)アイデンティティが、移民による民族的・文化的多様性の増大によって自明のものとはいえない状況が成立している。そのなかで、異なるバックグラウンドを持つ人々の共生や多文化間の対話を促進するような動向が存在するとはいえ、他方では、さまざまな対立や差別そして管理強化の動向も依然として強まっている。このような問題の解決に向けて、私たちはどのような理念と具体的な解決策を見いだしていけるのだろうか。

一九六〇年代に「同化政策」や「統合政策」を公的に退けて、多文化主義の政策を採用し、文化的多様性の尊重が国家のアイデンティティであることを自ら宣言したのはオーストラリアである。ところが、ジョン・ハワード政権が誕生した一九九六年以降、オーストラリアは多文化主義の政策を転換させた。「多様性を称賛することはわれわれを一つに結び付ける共通の価値ではなくなった」、それに代わって「オーストラリア人であることがなにかをより理解すること、われわれが共有すべき価値にもっと光を当てること」が重要である、とされたのである。「多文化主義」から「統合」への政策転換であった。これは単にオーストラリアだけの問題ではなく、程度の差こそあれ、「多文化主義」を進めてきた欧米各国に共通した動向とみることもできる。さらに研究者の間でも「多文化主義」に関して、それがマイノリティ文化であれメインストリームの文化であれ、それを不変のものと見なす本質主義的な理解に立つものであること、したがって従来のこうした「本質主義的な多文化主義」が多様な文化の相互の理解と対話の可能性を閉ざしてしまいかねないことなど、さまざまな問題が指摘され、「多文化主義」の終焉さえ語られる状況がある。

オーストラリアの研究者イエン・アンは、オーストラリアをめぐる前述の政策転換を、従来の民族差別主義者が主張してきた「統合」への単純な回帰として理解すべきではなく、二十一世紀に登場した「新たな統合」に関する言説を安易に放逐すべきではない、と指摘する。彼女によれば、「統合」と「多文化主義」を正反対の、対立する二項として理解することは、現在生じている事態をよりの確に理解することに はつながらない。「複数の単一文化主義」とたびたび同一視されてきた「多文化主義」の問題点を克服するためにも、異なる複数の文化が交錯し、文化が相互に変容する相互作用＝インターアクションの契機として「統合」を位置づける必要があるのではないか、というのである。

こうした多文化主義や、それが実際に実行されてきた後の問題にかかわる論議を前にすると、日本での状況の深刻さを考えずにはいられない。政府が重い腰を上げてようやく「多文化共生」を掲げたのは二〇〇五年のことである。

文化的に異なるバックグラウンドを持つ人々がその違いを認めながら、差別なく共に生きていく社会を創るという「共生」の課題を避けることはできない。多文化主義の隘路に陥るのではなく、偏狭な「同化」や「統合」に行き着くでもない、新たな道をどう創り出していくのか。これまで見てきた神戸の定住外国人、そして日本人が共同するメディア実践のプロジェクトは、その点で多くの示唆を与えてくれるのではないだろうか。

※(注) このFM局——多言語放送のミニFM局として神戸市で開局した「FMわいわい」のこと。

問一 筆者が目指す「統合」とはどのようなものですか。二〇〇字以内で答えなさい。

問二 問一で記した「統合」の観点から、本文における「FMわいわい」の設立に至る経緯をまとめなさい。また、そのことについてのあなた自身の意見を述べなさい。ただし、前者を第一段落として最初に述べ、後者を第二段落以降に述べる形式として、合わせて八〇〇字以内で答えること。

B 本校の「志望理由」を八〇〇字以内で述べなさい。